

高砂歴史ツアー2

実業家であり発明家でもあった工楽松右衛門（1743-1812）は、松右衛門帆を発明し、向島防波堤など港町としての高砂の発展に大きく貢献しました。その功績を称えられ、高砂神社に銅像が建てられています。

向島と工楽松右衛門

高砂市は瀬戸内海の播磨灘に面しています。市の大部分は加古川河口西側の沖積平野に位置し、海岸線の大部分は埋立地です。

高砂は、江戸時代（1603 ～ 1867 年）、航路の発展と日本海側の都市との交易において重要な役割を果たしました。

しかし、江戸時代後期、高砂港は加古川から流れてくる土砂の堆積によって水深が浅くなり、航行が危ぶまれ、港のインフラに依存する地場産業や地域社会に支障をきたすという困難に直面しました。

工楽松右衛門は宮本という名の漁師の家に生まれました。宝暦8年（1758 年）、兵庫津（現在の神戸市）に移り住み、海運商の御影屋平兵衛に弟子入りしました。40 歳頃に独立し、御影

屋を名乗りました。蝦夷の松前、日本海側、瀬戸内海、江戸などを航路に、米、材木、木綿、海産物などを運びました。

航海中や荷揚げのために港に停泊する際、船が直面する問題の解決策を見つけるのが得意だった松右衛門は、技術者としての才能を認められるようになります。1808 年、彼は高砂の町の人々に高砂港の土砂問題の解決を依頼されました。彼の解決策は、川を浚渫し、大型船のために沖合に新しい埠頭を建設することでした。松右衛門はまた、港内の土砂を浚渫し、向島防波堤を建設するという仕事を成し遂げるために、土砂投棄船と石抜き船を発明しました。さらに、北海道の北に浮かぶ択捉島の港湾建設や北海道函館市の港湾改修にも携わりました。

また、松右衛門の発明として最もよく知られているのは、当時帆に使われていたどの素材よりも丈夫で柔軟性があり、長持ちする木綿素材、松右衛門帆を開発したことでした。彼は何本もの糸を撚り合わせて綿糸を作り、その糸を織機を使って布に織り上げました。この帆布で作られたより丈夫な帆は、船をより速く走らせ、より安全に航行できるようにしました。その結果、輸送能力が高まり、日本の海上貿易は飛躍的に成長しました。農学者・大蔵永常（1766-1860）は、1822 年に出版した農具に関する著書の中で、松右衛門帆が日本中のあらゆる海船や川舟に使用されていたことを記しています。

こうした功績から、江戸幕府は松右衛門に「工楽」の姓を与えました。

高砂港の改修は 19 世紀後半まで続きました。工楽の子孫たちは、港を修復し、港の西側に新しい農地を開拓するプロジェクトを指揮しました。この土地は宮本（または工楽）新田と呼ばれました。現在は、化学メーカーの株式会社カネカの高砂工業所の一部となっています。

湛保の祠

1864 年に高砂市南材木町に建造され、1960 年代初頭に現在地に遷座されました。社殿の台座には、関わった人々の名前が刻まれ、それぞれの功績が記されています。港の改修を記念して 1929 年に追加されたものがあります。